

☆刈谷で新設の特別支援学校、病院が看護師派遣へ

朝日新聞デジタル 愛知 2017年11月29日

<http://digital.asahi.com/articles/ASKBZ4H0TKBZOIPE01M.html>

＞ 特別支援学校に通う医療的ケア児に学校でケアを提供するため、看護師を病院から学校に派遣してもらう新事業を愛知県刈谷市が来年度から始める。学校が雇う看護師の場合、欠員が出ると支援体制が不十分になる恐れがあるため、病院から派遣を受け、安定的にケアを提供する狙いだ。

刈谷市によると、来年4月開校の市立特別支援学校に、同市の刈谷豊田総合病院から看護師を派遣してもらう方向で病院側と協議している。支援校は市立小垣江東小学校の敷地内に建設中で、初年度は小学部～高等部の肢体不自由児約30人を受け入れる。

狙いは、安定的な医療的ケアの提供と、保護者らが付き添う負担をできる限り減らすことだ。

学校の看護師は一般的に、学校側が知り合いのつてやハローワークを通じて確保するが、欠員が出た場合、代わりがすぐに見つかるとは限らない。支援体制に穴が空き、保護者らが学校内で付き添う必要が生じる可能性もある。一方、病院から安定的に看護師の派遣が受けられれば、切れ目のないケアが提供できる。

また、修学旅行の際、看護師の増員や宿泊を伴う支援が可能となるようにも協議をしているという。急な増員が難しい学校看護師では、これまでは対応が難しかったケース。市教委の担当者は「医療的ケア児の安全な学校生活を確保し、保護者が安心して学校に送り出せるようにしたい」と説明する。同じような方法は熊本県が2002年から導入している。県内の七つの支援校が地元の医療機関と契約し、昨年度は看護師計16人が派遣された。

導入の背景には、学校が雇用する看護師たちが抱えがちな課題がある。熊本県教委によると、学校看護師の場合、医療的ケア児の主治医と雇用主である学校、保護者のそれぞれから指示や要望があるため、人によっては板挟みに悩むケースがあるという。

例えば、鳥取県では2年前、保護者との関係などに悩んだ県立養護学校の非常勤の看護師6人が一斉に退職し、医療的ケア児が一時的に登校できなくなったことがあったという。

病院が派遣する看護師の場合、指示が病院の医師からに一本化される。配置換えも柔軟にできる。熊本県教委の担当者は「派遣された看護師は学校と雇用関係もないため、医師の指示書に従い、できることが明確化されるというメリットがある」と話した。

◇

〈医療的ケア児〉 人工呼吸器やたんの吸引、胃ろうによる栄養の注入などの生活支援が日常的に必要な子ども。文部科学省の調査によると、2016年度、全国の公立特別支援学校に在籍する医療的ケア児は8116人で、07年度に比べて約1・3倍に増えた。

医療の発達为背景にあり、学校の対応が課題になっている。

…などと伝えています。

△刈谷市立刈谷特別支援学校について

刈谷市教育総務課 2017年11月24日

<http://www.city.kariya.lg.jp/kurashi/kyouiku/tokubetushien/tokubetsusien.html>